

# 特集にあたって

侵襲下の代謝は無侵襲下と大きく異なることから、その特性にうまく合致した栄養サポートが必要になります。異化が亢進し栄養が“身につかない”状況で、侵襲下の栄養療法は生体を構成する、あるいはエネルギーとなる基質を補給する目的のみならず、免疫システムへの効果も期待され、その成分に工夫が重ねられてきています。また投与経路や方法について、経静脈栄養と経腸栄養、血糖管理の方法や程度、至適投与カロリー量とその根拠、そしてモニタリングなどの議論がつづけられていますが、これらが現在どこまで進んでいるのかも整理してみる必要があると考えました。

このほか、病態別の推奨される栄養療法はもちろんのこと、チーム医療と栄養療法、また栄養療法におけるトラブルシューティングも興味深い話題です。さらに、終末期における胃瘻の適用については、日本老年医学会よりガイドラインが示され、救急集中治療領域においても議論の必要な問題になってきています。

栄養療法は、急性期から回復期、また回復後に至るまでの一続きのものでありますので、縦割りに議論するのは難しいところですが、それぞれを一線の先生方に工夫して執筆いただきました。本誌読者にとって、本特集「臨床栄養；注目の話題」が今日からの臨床に役立つようでしたら幸いです。